

昨日の午後のことだった。それはまるで夢のような出来事。

こんにちは～。

突然、白髪で長髪の青年が、僕に話しかけてきた。街中で、沢山の若者やオシャレなカップルがウインドウショッピングをしている中、その青年はサンタの格好で一見浮いているにも関わらず、誰も目にとめる様子はなく、完全に僕だけが目の前のその青年を凝視していた。

「ボクのこと誰だかわかるよね？」

突然そんなこと言われても…。と思ったが、よく見ると、いやよく見ないでも一目で彼が白人であることは確かで、しかも若いのに全身の毛という毛が真っ白。わずかに金や銀が混じっているかな？程度の極めて珍しい毛色の持ち主だということがわかった。たぶん地毛だと思われる。だって、睫毛や眉毛、産毛まで全部が全部、完全に根元から白いから。

「サンタさんだ」

僕は口に出して答えていた。

「正解！やっぱり、キミみたいな純粹そうな少年にはわかると思ったんだ！」

「……こんなところで何してるの？今は1月だけど……」

僕は言われるほど純粹じゃないだろうし、サンタと答えたのも単に彼が白髪のくるくるパーマでサンタの衣装を身にまとっていたからであり、こんな若くてイケメンの痩せたサンタがいるか、と心の中では思っていた。しかし、面白そうなので話に乗ってみる。

「うん…、察しが付くと思うけど、ボクまだサンタの卵なんだよ。見習い。親父がサンタで、ボクにもゆくゆくは自分の後を継いでもらいたいって言うんだ。ボクはまあ、どっちでもいいから引き受けたんだけど、サンタになる条件って結構厳しいんだよ。今その特訓中なんだよね。例えば、キミみたいな子供に本物のサンタだってちゃんと認識されるくらいの“らしさ”を持たなくちゃいけなくて、それが案外難しいんだよ。ほら、サンタのかっこした人って、結構いるからさ。今はシーズンが終わったからあんまり見ないけど。」

「お兄さんは全然それっぽいよ。だって外人さんだし、目の色とか、髪の色とか、すごく本格的な感じがする…」

「どうも。本格的っていうか、“本格”なんだよ。親父がだけど。」

なんだか、マジで言ってるのかこいつ…と不穏な感情になりながらも、僕はまだ小6で、つい数年前まではサンタの存在を信じていたので、外人の危ない男が自分に絡んできたという悪い状況下にあるといった判断を無理やり振り払い、本当かもしれない…と半ば無の境地で前向きにとらえようとしていた。

「それから、これは必須事項なんだけど、人の家に気づかれずに侵入する術を身に付けなくちゃならない。」

それって、犯罪だろ！と、僕は益々動揺の色を濃くした。が、なぜか僕は一步もその男から離れるどころか、目を離すことさえできなかったのだ。

「でも、それって犯罪なんじゃないの…？」

僕は思い切って聞いてみた。すると…

「見て！」

瞬きをして次の瞬間、目の前の彼が半透明になっていっているような気がして、目をこすってよく見たが、なんだか視界がぼやぼやしてよくわからない。そのうちにはっきりと彼の体の向こう側の景色が透けて見えるのがわかった。彼が笑っている表情だけが何となくだが風景の中に浮かび上がっている。それから、すぐにまた輪郭がはっきりとしてきて、色が空間から滲み出てきたかと思うと、あっという間にまた元の青年の姿がそこにあった。

「……………！？！何、今の！！？」

「ほら、これ」

彼が空中で手のひらを上にして一回弾ませると、まるで手品のように、小さ目の箱がポンッと音を立てそうな勢いで彼の手の上に現れた。それを片手に乗せたままそっと、僕の目の前に差し出すと、

「これ、キミにあげるね。お近づきの印に。」

と、そのままの紳士的な姿勢で僕が受け取るのを待った。

僕は無言で受け取り、自分の手のひらの上でそれを眺めた。

箱は深いブルーの白い星がちりばめられた、宇宙みたいな柄の素敵なものだった。リボンも付いてなく、上蓋をそっと持ち上げると、中には、石だ…。

僕は若干がっかりしたが、知らない人から何かプレゼントされるのにいいものを期待するのはやましい。だって僕は何のお返しもしないのだから。

でも、よく見るとその石はブツブツ細かい穴が空いていて、よくよく見ると穴が空いているというよりか、細かないろんな種類の石が組み合わさってできた集合体で、キラキラしている部分もあった。でも、遠目に見るとただの焦げかすか、溶岩のかけらだ。インテリアにはあまり向かない見た目だ。

「それね、サンタ協会で量産してるプレゼントの一つなんだけど、たくさんあるからいっこあげるね。遠慮しないで。」

「……………ありがとう。」

僕は子供で、物の価値もよくわからないので、とりあえずここはお礼を言うべきだと思った。だが、そんなことよりもさっきのあれはいったい何だったのだろう。僕は手の上の石が何なのかも気になるが、今起こった出来事の一切が夢のような気がして、頭がクラクラした。

「ビックリした？今の技なんだけど、代々サンタさんだけが習得できる秘伝の術で、この二つを駆使して、子供のいる家に侵入し、枕元にプレゼントを置くという任務を遂行させるんだ。」

忍者かよ！！と思わず口にしようになったが、やめた。任務とか……………夢のあるサプライズなのに言い方がなんかぶち壊しにしている…。

「すごいね、さっきの技、どうやったのかはわからないけど、とにかくすごいよ。ところで、僕そろそろ家に帰らないと、塾とかあるから…。」

「送っていいか？」

「いや、大丈夫です。いろいろと、ありがとうございました。」

僕はクラクラした頭のまま、ゆっくりと踵を返した。

「他に、何かボクに聞きたいこととかないの…？」

「え？」

振り返ると、さっきの男はさっきよりも10歳くらい老けたような萎れ加減で、哀れな子猫みたいな眼差しを僕に向けていた。

「…え、いや、すみません…塾があるので…。」

僕はなぜだか非常に申し訳ないような気がしたが、事実なので、彼から視線を逸らしたままそう答えた。

しかし、彼を見るとどんどん老けていくのが目に見えてわかり、腰が曲がり、背が縮んでいった。僕は慌てて、

「あ、いや、その、…さっきの石はどうやって使うんですか?!」と質問すると、

「さっきの石はこうするのじゃ…」と老人は僕から箱を掴み取り、中の石を取り出すと、石は彼の指の間でパリーンと粉々に砕け散り、中から金色の球が…!!その球をさらに空中高く放り投げると、球は一瞬にしてそりに変身した。

光の粉が舞う中、僕があっけにとられていると、サンタは素早く空中に浮かぶそのそりに乗り込み、

「一緒に来る？」

と僕に向かって、聞いた。

僕はこうすることに必然性を感じて、彼を見つめたまましずかに首を横に振った。

「君は本当に、本物だったんだ。」

サンタはニッコリと微笑むと、手綱を取り、するとその先に見る見るうちに雪でできているかのような幻想的な白いトナカイが4頭現れ、上空へ向かって走りだした。

ぐんぐん上昇していくそりを目にして僕はハッとして、大きく手を振ると、サンタに向かって叫んだ。

「サンタさーん!!」

走るそりの上から僕を見下ろしたサンタは、もう元の若々しい姿にもどっており、子供のような無邪気な瞳で、

「またねー!!」と叫んでいた。

僕はしばらく空を見つめていたが、そりとトナカイが夜の始まりの薄暗い色に溶け込んで見えなくなると、またゆっくりと視線を落とした。街はいつもとなんら変わらない風景を保っていた。

足早に帰路を進みながら、僕は興奮と歓喜を抑えるので精一杯だった。誰にも言っ

いけない気がする。しかし、僕の中ではっきりと、今の出来事が嘘ではなく事実として息づいていた。サンタさんはいた。

さっき石がはじけた時に舞い散った宝石の粒は、雪となって僕の髪や肩を白く染めていた。

おわり

b y 奏枝